

第三十八期同窓会

を終えて



長 幹 事 長 二 二
永 原 讓
(昭和四十七年卒)

まずは、昨年十一月九日開催の第三十八期同窓会に、想定外の多数の同窓諸氏にご参加いただき、急遽サブ会場を増設するという、嬉しいハプニングもあり、当番期を代表して、参加各位に心より厚く御礼申し上げます。また、サブ会場での参加になった皆様には、たいへんなご不便をおかけしましたが、想定外の盛況に免じて、お許しください。また、百年に一度の不況にもかかわらず、多くの、企業や会員の皆様に、協賛広告のご協力をいただき、心よりお礼申し上げます。

さて、私たち第三十八期当番幹事会は、昨年一月に発足をもち、当番幹事諸氏の「永原、お前がやれ」という熱い声に押されて、公務多忙

の身ではありませんでしたが、幹事長をお受けしました。やるからには、史上最高の同窓会をやるとうと決意を固め、大台超えの資金目標と、これも史上初となる記念誌の発刊を掲げました。そのため、当番幹事会役員各位には多大な負担を強いることになりました。田中正直君、桜井剛君を中心とする若い副当番（平成三年卒四年卒）にも過酷な苦勞をかけたのですが、本当によく頑張ってくれました。また、野田紀子さん、隅田由美子さんをはじめとする女性陣の頑張りには敬服ものです。心から「ありがとう」を申します。もう一つ特筆すべきは、本部事務局から「ここ十数年、定時制の当番期が組織できていない」と聞いていましたが、朝部壽君（定四十八年卒）の奮闘努力で定時制当番期が立ち上がったことです。三月には全日制四学年と定時制による当番幹事会組織が固まり、企画進行、広報会計、編集の三つの専門部が組織され、また、『再会〜よみがえれ青春〜』のテーマも決まり、本格的な当番活動が開始されました。以来、十回の当番幹事会議と専門部会議が開催され、企画と編集は臨時会議も組み入

れ、日を追う毎に熱気が燃え盛り、十月には資金の大台越えと記念誌発刊という、二つの目標が達成できました。当日に向けた最後の詰めと本部・学校・会場との調整では、企画進行委員長の原田篤君を中心とする担当各位にずいぶん苦勞をかけたのですが、史上最多の参加者数という大成功で報われたと思います。総責任者である幹事長として、当番各位に心から感謝するとともに、その働きを誇りに思います。

不思議なもので、最初は嫌々ながらの会議も、回を重ねる中で、同期には「おい、お前」の高校時代（青春）が甦り、五十代の正当番と三十代の副当番との間には愛の絆が生まれ、会議が待ち遠しい感覚になりました。同窓会を終え、十一月二十一日に会計報告・総括反省・解散式を行いました。だが、肩の荷を下ろすとともに、「これで終わるのか」という一抹の寂しさを感じました。当番をすることは、「同じ釜の飯を食う」の感覚があつて、新たな人間関係も形成されます。この関係が今後の人生に豊かに活かされればと願っています。

今回の当番幹事会決算で、かなり

の余剰金が出ました。私は、第2号会報の中で「母校に寄与できる今期同窓会にしたい」と述べました。いろいろ検討しましたが、部活動の活性化を願い、母校の体育文化後援会にバスを寄贈しました。最近、残念なことに某高校でバス転倒事故が起こっています。バスの使用については、くれぐれも安全に留意されるようお願いいたします。そして、東鷹健児には、文武に亘って果敢に挑戦し、私どもの期待に応えていただきたいと思います。

終わりにりましたが、第三十八期同窓会のファイナルで、次期当番の河野尚之君（四十九年卒）に引継ぎのたすきを渡しました。先輩当番として、次期当番幹事会をしっかり応援いたします。次期同窓会の大成功を祈りながら、私の挨拶といたします。

